

白山媛神社

白山媛神社は、海上安全、国の守護、地域の繁栄に関連する女神である伊弉册尊（いざなみのみこと）と菊理媛命（くくりひめのみこと）を祀る神社です。創建年代は不明ですが、少なくとも数世紀前から、村と日本海を見下ろす高台の現在の場所に鎮座しています。毎年5月3日と4日に行われる春季大祭では、寺泊の町中を大行列が練り歩き、お神輿が渡御され、本殿では神楽が奉納されます。

白山媛神社には、海上安全を祈願して奉納された貴重な52枚の船絵馬が所蔵されています。1774年から1889年まで活躍した船が描かれており、重要有形民俗文化財に指定されています。

本殿

現在の本殿は、1758年に焼失した旧社殿に代わり、1771年に建てられたものです。木造の本殿の外壁には、龍、水上の菊、梅の花、虎などの木彫が施されています。格天井には、雲に浮かぶ龍の墨絵を囲むように、季節の花々が色鮮やかに描かれています。社殿の扉が閉まっている場合は、開けて中に入って天井を見ることができます。

内陣の仕切りにかかる大きな表札には「白山宮」とあり、これは白山媛神社の別名です。松平定信（1759-1829）の書をもとに彫られました。その文字は、鳥の抽象的な形を筆の

中に隠すという遊び心のある文字で書かれています。その他、春季大祭の古い写真、提灯、寺泊港の大きな絵などが展示されています。

二面神社：二つの顔を持つ神

白山媛神社の摂社のひとつである二面神社には、寺泊独特の神様が祀られています。言い伝えによると、この神社は1391年に地元の漁師によって建てられました。漁師の平三郎が夢の中に未知の神様が現れ、波の下に閉じ込められていると言います。平三郎はその神様の指示に従い、翌日海中を探索したところ、奇妙な二面の像を発見しました。その木像は39センチ×82センチの枠の中に彫られています。両面に西洋人らしき人物が描かれており、その人物は縄を持って魚の入った網を引き揚げているようです。片面が男性の姿、もう片面が女性の姿で描かれていることから、二面神社と呼ばれるようになったと考えられています。元々は西洋の船の装飾であった可能性を指摘する学者もいます。

平三郎が二面神社にご神体を祀って以来、海上安全、豊漁祈願の神として崇敬されてきました。しかし、キリスト教が禁じられていた何世紀もの間は、キリスト教の遺物と間違われることを恐れて、この神像は通常では非公開でした。そのため、公の場で祭りをを行う代わりに、宮司と村の漁師長が年に2回、3月と9月に神社で秘密の儀式を行うのが慣例となりました。その儀式の一環として、宮司と漁師長たちは、象徴的に神像をもう一方の性別の姿に裏返し、

それから個人的に村人たちを訪ね、神の恩恵を分かち合うのです。

神社の境内

白山媛神社には、二面神社のほか、天照大御神、稲荷大神、住吉大神、須佐之男命、そして八天宮を祀る摂社もあります。10月から11月にかけてはツワブキが咲き乱れ、苔むした風景に鮮やかな黄色が散りばめられます。本殿の左側にある木造の建物には、春季大祭で使われる豪華な金箔張りの神輿と、白い神聖な馬の木像が納められています。船絵馬の収蔵庫の前には、江戸時代（1603-1867）の古い船の錨と花崗岩の係留石を展示しています。内部の船絵馬を見学したい場合は、事前に神社に電話で予約することができます。